

1 4	岡 崎	北野小学校	マスコ サワ 氏名 増子 紗和
分科会番号	1 0	分科会名	家庭科教育

1 研究テーマ

習った技術を生かし、自分で縫い方を選んで小物を製作できる子供の育成
～小学5年生 「ソーイングはじめての一步」の実践を通して～

2 研究概要

(1) 主題設定の理由

本学級の児童は、5年生から始まった家庭科の学習に意欲的に取り組んでおり、特に裁縫の学習に関心をもって活動している。これまでの学習を通して、玉結びや玉どめ、なみ縫いなどの基礎的な技能を身に付け、教師が示した手順や縫い方に沿って製作することができるようになってきた。しかし、その一方で、製作活動においては教師の指示どおりに進めることが多く、「どの縫い方が適しているか」「より使いやすくするにはどうしたらよいか」など、自ら考えて判断しようとする姿が十分には見られない。身に付けた技能を活用して工夫する力や、自分で工程を選択して製作する力に課題があると考えられる。

そこで、本単元では実生活で活用できるペンケース作りを行うことにした。日常的に使用できる物を製作することで、児童の「自分で作りたい」という意欲を高めることができると考えた。また、ペンケース作りの中で、玉結びや玉どめ、ボタン付けなどの基礎的な縫いの技術を繰り返し使うことで、確実に身に付けることを目指す。さらに、ペンケースの用途、縫い目の特徴に応じた適切な縫い方を自ら選択し、工夫しながら製作する活動を取り入れることで、既習の技能を活用して主体的に課題を解決しようとする力を育てることができると考えた。

以上のことを踏まえ、本研究では、「習った技術を生かし、自分で縫い方を選んで小物を製作できる子供の育成」を主題として設定した。

(2) 目指す児童像

○身に付けた縫いの技能を生かし、目的に応じた縫い方を主体的に選択して、工夫しながら小物を製作することができる子。

(3) 研究の仮説と手立て

仮説・・・製作の見通しがもてる資料や縫い方の特徴を可視化し、友達と相談しながら学習できる環境を整えれば、児童は習った技術を生かして目的に応じた縫い方を自分で選び、小物を製作できるようになるであろう。

【手立て】

① 座席の工夫

裁縫の授業が始まる前にとったアンケートでは、学級の半数の児童が裁縫に対して不安な気持ちがあると答えていた。初めて裁縫を行うという児童が多くいる中で、困ったときや分からないところがあつたときにすぐに質問したり、近くの児童の様子を確認したりして活動に取り組めるように、号車ごと、6人グループ、4人グループなどに机を合わせる。そのときの状況や、安心して取り組める人間関係に合わせてまとまりの人数を変えるなど座席を工夫する。

② 手縫いの流れや、製作の手順などの可視化

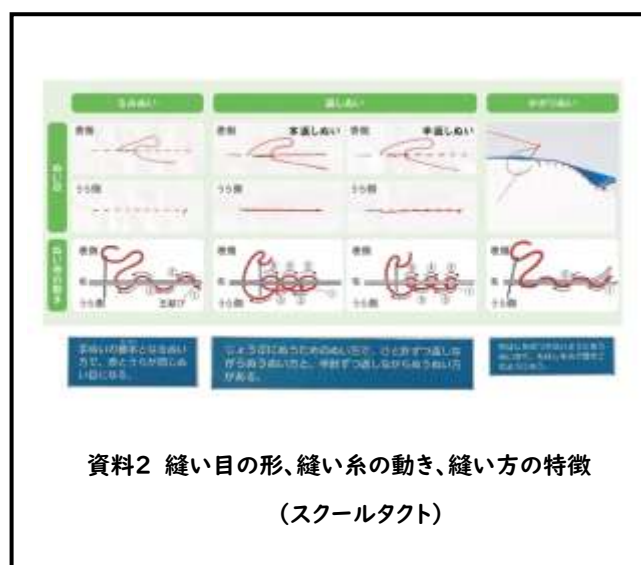
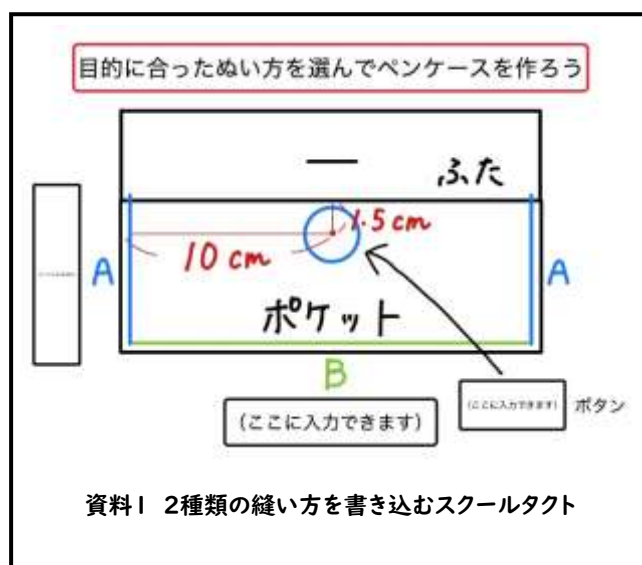
手縫いの基本的な流れ（①針に糸を通す②縫い始め（玉結び）③縫う④縫い終わり（玉どめ））を児童がすぐに確認できるよう、裁縫の際には常に手順を黒板に掲示する。また、ペンケース製作の際には、児童がいつでも作り方を振り返られるよう、製作の手順を示したものや、縫う場所やペンケースの図などを黒板の見える位置に掲示する。同じ図をスクールタクトにも載せることで、手元でも確認しやすいようにする。

③ 保護者の協力

児童一人一人に応じた助言や支援を行うために、教師や教員補助に加え、家庭と連携し、普段から裁縫に親しんでいるであろう保護者の協力を得る。具体的には、手縫いの基礎的な技能である「玉結び」、「玉どめ」、「なみぬい」などを練習する授業の際には、数名の保護者の方にボランティアとして学校に来ていただき、作業の補助や困っている児童への声かけなどを願う。

④ スクールタクトを活用した縫い方の選択

ペンケースで縫う3辺をAとBに分け、2種類の縫い方を選んで、スクールタクトに書き込めるようにする（資料1）。スクールタクトは手軽に記入したり、書き直したりすることができる上、児童同士の共有も容易にでき、それぞれの児童がどの縫い方を選んでいるか、教師も把握しやすい。縫い方を選ぶ際には、縫い方の特徴や、縫い目の形を参考にできるよう、同じスクールタクト課題内の別シートに縫い目の形と縫い糸の動き、縫い方の特徴が分かるものを提示する（資料2）。また、完成品の写真も載せることで、出来上がりのイメージが付きやすく、縫い方を選ぶ際の参考になると考える。



3 実践

(1) 単元計画 (13 時間完了)

本研究を進めるにあたって「ソーイングはじめの一步」(「わたしたちの家庭科・開隆堂」)を単元とし、以下のように単元計画を作成した。

段階	学習課題	時間
【導入】	裁ほうに使う用具にはどのようなものがあるのかな	第1、2時
【展開】	玉結び、玉どめ、なみぬいはどのようにするのかな	第3、4時
	なみぬいのほかにはどのようなぬい方があるのかな	第5、6時
	ボタンをつけるときにはどのようなことに気をつけたらいいのかな	第7、8時
	使いやすいペンケースにするためにどのようなぬい方を選んだらいいのかな 【ペンケースの製作】	第9～12時
【終末】	学んだことをこれからの生活にどのように生かしていけるかな	第13時

(2) 実践

【導入】

第1、2時 裁ほうに使う用具にはどのようなものがあるのかな・・・手立て①

単元の最初に、裁縫の授業を行うということで、布で作られたものにはどんなものがあるか子供たちに聞いた。服や手さげかばん、きんちゃく袋など、児童の身近にあるものが多く挙げられた。そして、それらは「裁縫」によって作られたものであると伝え、裁縫とは、針と糸を使って縫うことだと確認した。また、子供たち自身が自分も裁縫ができるようになりたいという思いをもてるように、教師自身が作ったあずま袋やポケットティッシュケース、ナップザックを提示した。それを見た子供は「すごい」「自分も作りたい」と口ずさむなど、裁縫への意欲を高めていた。その後、裁縫セットの中身を見て、必要なものが揃っているか確認し、同時に名前が書いてあるかも確認した。裁縫用具は細かいものが多いため、ずっと使い続けるためにも必ず記名することを伝えた。4人グループで机を合わせたことにより、初めて扱う裁縫用具でも不安感なく確認することができた。また、用具を確認しながら、それはどんな用途で使用するものなのか考えた。リッパーやチャコペンシルなど、あまり聞きなれない用具については、使い方を悩む姿が見てとれた。

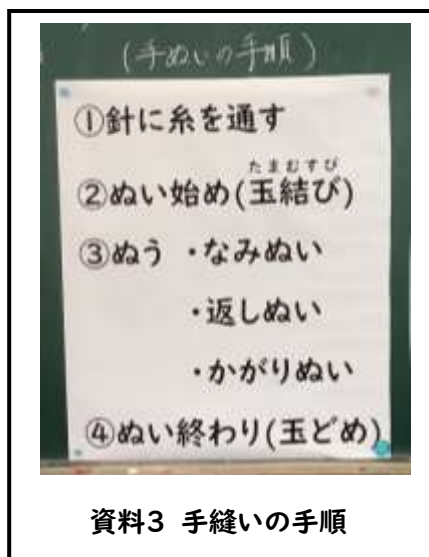
【展開】

第3、4時 玉結び、玉どめ、なみぬいはどのようにするのかな・・・手立て①、②、③

この授業では、保護者の方が来て、児童に対する助言や手助けをしていただくことになっていたため、子供たちの机を号車ごとで向かい合わせにし、学級を大きな3つのまとまりに分けた。そして、それぞれの号車に保護者1名を担当とし、子供の活動の様子を見ていただくようにした。

前時で確認した裁縫用具を使い、今日からは実際に縫っていくことを伝え、授業に入った。前時に引き続き、裁縫に対する興味関心は大いにあるようだった。最初に手縫いの手順(資料3)を確認し、まず「①針に糸を通す」作業を行った。糸が見やすいように黒色の手縫い糸を使い、針は短針を使った。使う糸の長さや針に糸を通すやり方は、子供たちの手元のタブレットで繰り返し動画が見る

ことができるようにした。タブレットや保護者の方の力を借りながら、「②縫い始め（玉結び）」「④縫い終わり（玉どめ）」「③縫う（なみぬい）」の練習も行った。玉結びの結び目が小さく抜けてしまう児童に対しては、「同じところで何度か玉結びをすると玉が大きくなり抜けにくくなるよ」と教えていただいたり、困っていることはないかと子供たちに対して声をかけていただいたり、保護者の方の存在は子供たちにとっても裁縫に対する不安を軽減する大きな力となっていたように感じた（資料4）。



資料3 手縫いの手順



資料4 保護者ボランティアの様子

第5、6時 なみぬいのほかにはどのようなぬい方があるのかな・・・手立て①、②

本時では、前時で行ったなみぬい以外の「返しぬい（本・半）」「かがりぬい」を練習した。まず、それぞれの縫い方にはどのような特徴があるのか、縫い目の形はどうなっているのかを知り、返しぬいは丈夫に縫えること、本返し縫いは表も裏も同じような一直線な縫い目になること、半返し縫いは片面はなみぬいのような縫い目になり表と裏で縫い目が異なること、かがりぬいは布端がほつれないように縫えることを確認した。その後は練習布を使い、それぞれの縫い方の練習をした。本時でも前時までと同様に、子供たちは手元のタブレットの手本動画を見たり、近くの席の子供と相談したりしながら、協力して活動する姿が見られた。

第7、8時 ボタンをつけるときにはどのようなことに気をつけたらいいのかな・・・手立て①、②

本時ではボタンをつけるということで、まず自分の着ている服にボタンがついているか確認をした。そうすることで、身近なところにもボタンがたくさん使われているということを認識した。二つ穴ボタンのつけ方を確認する中で、ボタンと布の間に隙間をあける理由を考え、実際にボタンはどのように使うか想像し、布を引っかけるための隙間であると気付いた。また、ボタンと布の間に3、4回糸を固く巻くことでどのようなよさがあるかと問うと、「糸が切れにくくなる」「ボタンがずれにくくなる」などさまざまな意見が出た。糸を固く巻くことでボタンを丈夫につけることができると理解できていると考えられる。そこで、「みんなの服についているボタンがすぐに取れちゃったらどう？」と聞くことで、自分もボタンを丈夫につけたいという思いを高めることができた。二つ穴ボタンからつけ始め、できた子はタブレットの手本動画を参考にしながら四つ穴ボタン、足つきボタンにもチャレンジした。

習った技術を使ってペンケースを製作していくことを子供たちに伝え、教師が作った見本のペンケースを見せると喜ぶ姿が見てとれた。やはり、実生活で利用できる物を製作することで、児童の「自分で作りたい」という意欲を高めることができると実感した。最初に今回は、ペンケースで縫う3辺をAとBに分け、2種類の縫い方を選んで縫うことを伝えた。縫い方を選ぶ際には、縫い方の特徴や縫い目の形を意識して選ぶようにし、選んだ縫い方をスクールタクトに書き込んだ。子供たちは、「ペンケースを見たときに目がいくのがAの部分だから、少しでも縫い目をきれいに見せるためになみぬいにした」「Bはペンケースの底にあたる部分だから少しでも丈夫にしたくて返しぬいにした」「長いペンも入れられるように布端を縫うかがりぬいを選んだ」など、自分の目的に合わせて縫い方を選んでいた（資料5）。

目的に合ったぬい方を選んでペンケースを作ろう なぜそのぬい方を選んだのか理由を書こう。	目的に合ったぬい方を選んでペンケースを作ろう なぜそのぬい方を選んだのか理由を書こう。	目的に合ったぬい方を選んでペンケースを作ろう なぜそのぬい方を選んだのか理由を書こう。
Aは、ぬい方をきれいに、見せたかったので、波ぬいにしました。Bは、ペンケースの底の部分なので物が落ちないように、丈夫な本返しぬいを選びました。また、半返しぬいに、表と裏で同じ見た目にしたかったので、本返しぬいにしました。	Aの部分をかがりぬいに、したのは、長いペンとかが入るようにしたかったからです。B部分を本返しぬいにしたのは、すこしでもじょうぶにしたかったです。ボタンを四つ穴にしたのは、とれないように、じょうぶにしたかったからです。	Aは、ぬいめをきれいに試してみたかったのでなみぬいにしてみました。Bは、少しでも、ものが入るようにかがりぬいに、してみました。

資料5 子供たちがペンケースの2種類の縫い方を選んだ理由

縫い方が決まったら、早速製作に取り掛かった。ペンケースの製作の手順（資料6）に沿って、まず、ペンケースのポケット部分に自分で選んだボタンをつける。ボタンをつけたらポケットと本体を重ねて選んだ2種類の縫い方で縫っていく。特にポケットと本体の境目部分は出し入れすることに備えて丈夫に縫うとよいことを伝えた。最後にボタンをとめる穴をあけるためにフェルトに切り込みを入れて完成する。早く完成した子供には、ふたの部分にワンポイントをつけてもよいことを伝え、自分の名前、ハートや星などの模様や好きなキャラクターを縫い取りしたりする様子が見られた（資料7）。

- ①ポケットにボタンをつける。
- ②本体にポケットを重ねてぬう。
（2種類のぬい方で）
（境目はじょうぶに!）
- ③ボタンをとめる穴をあける。
（布を折り曲げてはさみで切る）
- ④ふたの部分にワンポイントをつける。

資料6 ペンケースの製作の手順



資料7 完成したペンケース（一部）

4 研究の成果と課題

(1) 成果

研究の仮説と手立て①～④が有効であったか検証していく。

座席の工夫や保護者の協力によって、困ったときにすぐ相談できる環境が整い、裁縫への不安を軽減しながら学習を進めることができたと考える。実際に裁縫が得意な児童が近くの席の友達に教える様子が見られた。保護者の方を含めて困ったときにすぐ聞ける人が周りにたくさんいたことで、授業後の児童のアンケートでは、裁縫の授業が楽しかったと9割以上の児童が回答していた。また、手縫いの流れや製作手順を可視化したことで、自ら掲示物やスクールタクトを確認しながら活動を進める児童が増え、主体的に課題を解決しようとする姿につながったと考える。さらに、スクールタクトを活用して縫い方の特徴や完成した作品を比較し、縫い方を選択する場面を設定したことで、「丈夫にしたいから返しぬいを使おう」「見た目をそろえたいからなみぬいにする」など、縫い方の特徴と製作の目的を関連付けて考える児童の姿が見られた。完成した作品にも、それぞれの児童の意図に応じた縫い方の工夫が表れており、身に付けた縫いの技能を活用して製作していることがうかがえた。

以上のことから、児童が身に付けた縫いの技能を生かし、目的に応じた縫い方を主体的に選択して工夫しながら小物を製作することを支える上で、①から④の手立ては有効であったと考えられる。

(2) 今後の課題

本研究を通して、多くの児童が裁縫に意欲的に取り組み、目的に応じて縫い方を選択しながら小物製作に取り組む姿が見られた。しかし、授業後の児童のアンケートでは、「裁縫が好き」と回答した児童が8割近くいた一方で、「裁縫が得意」と回答した児童は5割程度にとどまった。裁縫に対して肯定的な気持ちをもつことはできたものの、技能面での自信には十分につながっていない児童もいることが分かる。また、今後作ってみたいものとして、バッグやポシェット、お守りという声が多く見られたことから、今後は児童の興味・関心に即した製作活動を取り入れ、学習した技能を実生活の中で活用できる場をさらに設定していく必要がある。自分の生活に役立つものを製作する経験を積み重ねることで、裁縫への意欲を高めるとともに、裁縫を日常生活の中に取り入れようとする態度の育成につなげていきたい。

さらに、ペンケース製作では目的に応じた縫い方の選択ができるようになった児童が多く見られた一方で、玉結びや玉どめなどの基礎的な技能に苦手意識をもつ児童も依然として多かった。これらの技能は製作活動の土台となるものであるため、繰り返し練習する機会を設けたり、手本動画や掲示物を活用し、いつでも確認できる環境を十分に整えたりすることで、より確実な定着を図る必要がある。

今後は、基礎的な技能の定着と、児童の興味・関心を生かした製作活動の充実を図りながら、裁縫で身に付けた知識や技能を実生活の中で活用しようとする児童の育成を目指していきたい。